立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２００５年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学研究科　フランス文学専攻		
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学部・文学研究科フランス文学専攻科主任教授	細川　哲士　印	
自然・人文の別	自然　・　人文	**個人・共同の別**	個人　・　共同　１名
研究課題名	中世末期における国王の入市式―「擬態」としての表象		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科フランス文学専攻 博士課程前期課程２年	影山　緑子　印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	同上	同上	
研究期間	２００５　年度		
研究経費	２００　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

当研究は、王が都市に入場した際の支配権確認のための儀式である王の「入市式」と都市の関係、及びその時代特性を解明しようと試みたものである。事例としては、詳細な市参事会議事録の残るフランス・リヨン、1476 年のルイ 11 世の入市式を中心に取り上げた。当時リヨンは、「国王の良き都市」と呼ばれる王権の中枢と密接な関係を持った都市であり、旧来の司教座都市から、商業都市としての性格を強めていた。こうした時代特性を如実に示すものとして、以下の３点より分析を行った。1)大市をめぐる入市式の主催者、市参事会員と王の関係、2)王の行列の経路の変更、3)王への貨幣贈与。

その結果、表面的には宗教的テーマにより王権の聖性を保ちつつ、実際は、大市、外交戦略をめぐり都市の人々、王の双方の意図が錯綜する、入市式の諸相が明らかになった。そこには、中世と近代の思想が混在する都市の思潮が反映されている。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　市参事会員　〕〔　国王の良き都市　〕〔　商業都市　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

当研究は、フランス・リヨン、1476年のルイ11世の入市式を中心に扱い、中世末期の入市式と都市の関係を解明し、その時代の思潮を浮き彫りにしようと試みたものである。リヨンという都市、および中世末期の特性を最も示す事柄として、以下の３点から分析した。

１）　リヨン市参事会員とルイ１１世―年４回の大市
２）　行列の行程の変更―「王国」から「帝国」へ
３）　王への贈り物―貨幣贈与

各項目の詳細は以下のようになっている。

１）中世末期入市式の主催者であった市参事会員たちは、法律家などの本職があるとは言え、俸給をもらって働く、いわゆる都市の役人である。案件は会議で決定され、議事録に書き記される。この点で、中世初期の入市式の主催者であった高位聖職者、ルネッサンスにおけるプロデューサー的役割を担う芸術家とは、全く立場が異なってくる。議事録作成の前には、複数の参事会員たちの意見の一致が必要であり、情報も複数の人間で吟味されたはずである。それゆえ、議事録に残された入市式は、当時の都市住民の時代感覚をかなり反映しているものと考えられる。分析資料として掲げたリヨンの入市式は、当時の市参事会議事録が残っており、リヨン古文書館にて原本の写真、複写を入手することができた。

また、王と市参事会員双方の最大の関心事であったリヨンの大市の拡大と特権の確約は、当入市式の影のテーマでもあった。18世紀、国の地方行政官（プレヴォ）や市参事会員達によって、議事録をもとに年代順にまとめられた『リヨンにおける入市式と王侯貴族、司教、教皇特使との関係』（1752年）では、ルイ１１世の大市に対する思い入れ、リヨンに赴いた外交的意図が強調されている。確かに、国内シャンパーニュの衰退と共に台頭してきたジュネーブの大市への対抗策として、リヨンの大市は重要である。さらに、英仏戦争がほぼ終わりかけたとは言え、フランス王国、さらに隣国と接するリヨン自体もまだ不安定な状況にあった。外交という発想は、戦うことをよしとするフランス中世に支配的であった騎士道という考え方からはむしろ逸脱するものである。

２）ルイ 11 世はジャン・ド・トロワの年代記等によると狂信的とも言えるキリスト教信仰、特に聖母マリアに対する崇拝心を抱いていた。各地の巡礼地には欠かさず出かけ、聖遺物に対する愛着も強かった。王の側近を輩出してきた市参事会はその点を考慮し、入市式のテーマを聖母マリアの生誕と生涯に設定した。王の行列が通る街路の重要拠点で、受胎告知など聖書のトピックスが、活人画と呼ばれる形式で町の人々によって演じられる。中世においては、題材はイエスの生涯を初め、キリスト教から取られることが一般的であった。入市式当日、このテーマについては、計画通りに進められたが、行列の経路の方は議事録で詳細に取り決められていたにもかかわらず、王の要望で、全く異なった地域になった。

当時リヨンは、特権も与えられるが戦費調達なども義務とする「国王の良き都市」の一つであり、王権の中枢と密接な関係を持っていた。また、ローマ時代に建設された旧市街の司教座都市―「王国」の部分と呼ばれる―から、商業都市としての性格を強めていた新興地域―「帝国」の部分へと都市の中心を移しつつあった。入市式の行列は当初「王国」の部分内部で行われるはずだった。しかし、王の希望で、「帝国」の部分を中心に進められることになった。変更された経路には、文字通り商人街であるメルシエール通りや主に大市の時に出店が並ぶソーヌ橋が含まれている。『1550年リヨン鳥瞰図』は少し時代は新しくなるが、大きく異なってはおらず、全体像を捉えるには役立った。このような検証の結果、この行列の経路の変更が単なる王の気まぐれではなく、商業的、戦略的意味合いが強かったのではないかと結論づけることができた。ルネッサンスにおける「帝国」の部分を中心とした都市の繁栄を考えると、なおさらである。

研究成果の概要　つづき

３）本来、入市式における王への贈り物は、松明、香辛料、オート麦など物品贈与が中心だった。しかし、扱ったリヨンの事例においては、貨幣贈与になっている。貨幣額を決定するために、たびたび会議が繰り返され、通常 12 人から構成される参事会がオブサーバーも含め、50 人近くになることもあった。大市の特権を確保するためには、王を満足させるような額の決定は重要案件である。一方、物品贈与の場合、シャルル 7 世のように内容も確かめずに家来に譲る例、またはルイ 11 世も他の入市式ではそのまま都市に贈り物として置いてきてしまう例など、むしろ王の権力、寛大さを演出するには大きな役割を担っていた。しかし、リヨン市参事会がここで貨幣贈与を選び、それを受け入れる王の背景には、いわば近代の合理性さえ見出される。こういった贈与された貨幣の多くは、王自身のために使われることは少なく、隣国への貢物など外交費用として使用された。都市側の資金は、タイユ税（直接税）や富裕な商人、銀行家からの借り入れによって調達された。

中世には都市の発展とともに、商人が賃借の記録として、法律家が裁判の記録として、書き記す習慣が広まってきた。13 世紀頃から都市では公証人も急激に増えてきたのも、この現象を示すものである。さらに、リヨンはルネッサンスにおいては、出版の中心都市となる。

一見無味乾燥に見える市参事会議事録上の入市式の記載も、上述したように、中世末期の人々の思潮について多くの情報を与えてくれる。そこには、テーマとしてキリスト教のモチーフを選び、中世最大の思想の鎧を纏わせながらも、大市に対する王の協力を確固たるものにしようとする都市側と、都市訪問を単なる儀式に終わらせず、戦略的・外交的な場として最大限に活用としようとする王の側、といった双方の意図が錯綜する。これは、扱った事例が、通常極めて儀礼的な祭典として行われる、戴冠後初の入市式ではないためでもある。しかし、それゆえ都市の発展、聖俗せめぎあいの記録として中世末期の人々が浮かび上がってくるとも言えよう。

※　この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。